

ハリー・ポッター・シリーズへの検閲とその理由

川崎 佳代子・川崎 良孝

Book Censorship on Harry Potter Series in Schools and Libraries

Kayoko KAWASAKI and Yoshitaka KAWASAKI

1 図書への検閲の概観：1990-2005年

アメリカ図書館協会知的自由部の統計によると、図書館資料や教材にたいする挑戦は、1990-2000年（1999年12月31日）に6,364件で、2000（2000年1月1日）-2005年には3千件を超えている。知的自由部の定義によると、挑戦（challenge）とは単なる口頭での苦情ではなく、資料への挑戦者が内容を不適として公式に資料の除去などを求め、それが知的自由部に報告されたものをいう。こうした挑戦の大部分は、学校の教材、それに学校図書館や公立図書館の蔵書が中心である。またこのデータは図書に限定している。インターネットなどの規制を求める具体的動きは広範にみられるが、それはこの統計には含まれていない。知的自由部は経験的に、1件にたいして4件から5件の知的自由部に報告されない挑戦があると判断している。

1990年から2005年までを年毎にみると、1990年の157件から単調に増加して1995年に762件と最多に達し、そののちは1999年の472件まで単調に減少した。そして2000年に646件と急増し、そののちは450件から500件くらいになっている。知的自由部の判断によると、1995年以降、2000年を別にして低減してきているのは、インターネット上の資源が注目を浴びているからだという。

挑戦が持ち込まれる機関をみると、1990-1999年では学校が2,025件、学校図書館2,013件、公立図書館1,462件となっている。そして2000-2005年ではそれぞれ、926件、1,363件、531件となっている。「学校」の場合は授業で使われる教材などを意味する。また予想できることだが大学図書館、学術図書館、専門図書館などの図書への挑戦は非常に少ない。

挑戦の開始者をみると、1990-1999年では親の3,427件が圧倒的に多く、続いて図書館利用者878件で、さらに教育委員会や図書館理事会のメンバー206件、教員169件、圧力グループ163件、その他のグループ136件、宗教団体107件となっている。そして2000-2005年でも、親が1,824件と圧倒的に多く、続いてその他のグループ466件、図書館利用者263件、教育委員会や図書館理事会のメンバー72件、教員62件と続いている。挑戦の開始者は親と図書館利用者が圧倒的に多い。もっとも、こうした親は宗教団体の考えに沿って動いている場合も多いと考えてよいであろう。

そして挑戦の理由をみると、1990-1999年では「性的に赤裸々」が1,446件、「不快な言葉」1,262件、「グループの年齢に不適」1,167件が多く、以下は「オカルト／悪魔主義」773件、暴力630件、同性愛497件などとなっている。一方、2000-2005年では「不快な言葉」811件、「性的

に赤裸々」714件、「グループの年齢に不適」504件が同じように上位3位を占め、暴力405件、「オカルト／悪魔主義」229件、同性愛164件と続いている。なお、2000-2005年の場合は「その他」が583件と非常に多くなっているが、その説明は加えられていない。

このような統計からみると、挑戦をうけるのは学校や学校図書館が最も多く、続いて公立図書館である。そして挑戦を開始するのは親が圧倒的に多く、続いて図書館利用者である。また挑戦の理由は「性的に赤裸々」、「グループの年齢に不適」、「不快な言葉」などである。すなわち挑戦の多くは子どもの「保護」を求め、子どもから図書を遠ざけることを目的にしているといえるだろう。

2 頻繁に挑戦される図書とハリー・ポッター・シリーズ

ところで、2000-2005年に最も頻繁に挑戦された図書のリスト、および1990-2000年のリストをみると、以下のような図書が入っている。マーク・トウェイン『ハックルベリイ・フィンの冒険』、ジョン・スタインベック『二十日鼠と人間』、J.D.サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』、アリス・ウォーカー『カラー・パープル』といった古典、それにロバート・コーミア (Robert Cormier) 『チョコレート戦争』(*The Chocolate War*)、ジュディ・ブルーム (Judy Blume) 『キャサリンの愛の日』(*Forever*)、マイケル・ウィルホイト (Michael Willhoite) 『お父さんのおともだち』(*Daddy's Roommate*)、レズリー・ニューマン (Leslea Newman) の『ヒザーには2人のおかあさん』(*Heather Has Two Mammies*) など、いわば挑戦される定番が入っている。これらの多くの図書が挑戦される理由は、性的に赤裸々、不快な言葉、グループの年齢に不適、オカルト／悪魔主義、同性愛、政治的理由、宗教的理由、暴力、人種差別主義、性差別主義、麻薬、反家庭的、性教育、中絶、さらには内容が不正確など実にさまざまであった。

当然といえるが、挑戦が多いのは、人気があり広く出回る図書、それも子どもを対象にした本である。そうした図書の典型として、世界的に大ベストセラーになったJ・K・ローリング (J.K. Rowling) のハリー・ポッター・シリーズ (Harry Potter Series) を指摘することができる。同シリーズの最初の3冊の刊行は以下のようになっている。

- *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, June 1997
Harry Potter and the Sorcerer's Stone, September 1998
 『ハリー・ポッターと賢者の石』1999年
- *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, July, 1998
 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』2000年
- *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, July 1999
 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』2001年

そのうち第4巻の *Harry Potter and the Goblet of Fire* (July 2000; 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』2002年) 以下が発行されていった。第1巻『ハリー・ポッターと賢者の石』のイギリス原版とアメリカ版の書名が違うのは、イギリスでは“philosopher”という語に「錬金術師」といった含意があるのにたいして、アメリカではそうした意味がないためである。

こうしたハリー・ポッター・シリーズについて、アメリカ図書館協会知的自由部が発行する隔月情報誌『ニュースレター・オン・インテレクトチュアル・フリーダム』をみる限り、2000年1月号の巻頭記事「ベストセラー本への挑戦：ハリー・ポッターが攻撃されている」が最初である。すなわちハリー・ポッター・シリーズの第1巻から第3巻までが刊行され、とりわけ学校の読書教材として1999年の秋頃から使われ始め、それが多くの挑戦を生む契機になったと考えられる。こうした発行時期にも関わらず、1990-2000（1999年12月31日）年に最も頻繁に挑戦を受けた図書上位100位の第7位に出現した。そしてハリー・ポッター・シリーズは2000年、2001年、2002年にはいずれも最も挑戦される図書として1位を、2003年には2位を占めることになった。また2000-2005年（2004年12月31日）までをみると、最も挑戦を受けた図書10位の首位になっている。

本稿はこうしたハリー・ポッター・シリーズを取り上げ、挑戦の開始者、対象となる機関、挑戦の理由、挑戦者が求める措置、学校や図書館の対処などを簡略にまとめていく。そのうち、挑戦の理由をとりあげ、そうした理由の分析を試みる。なお、本稿はあくまで、『ニュースレター・オン・インテレクトチュアル・フリーダム』に掲載された事例に限定する。というのは本稿の目的は、事例の網羅的な収集と紹介にあるのではなく、挑戦の理由についての分析を中心としているためである。

3 ハリー・ポッター・シリーズにたいする学校や図書館への苦情一覧

既述のように『ニュースレター・オン・インテレクトチュアル・フリーダム』でハリー・ポッター・シリーズについての記事がでたのは、2000年1月号が最初で、そこでは1999年度の後半に生じた主たる検閲事例をまとめている。そのうち同年11月号までに報告された事例の一覧が<表1>「ハリー・ポッター・シリーズへの挑戦」である。

この表には少し説明が必要であろう。まず各事例が生じた年月を示していないが、これは事例が生じた年月を報告している場合が比較的少ないからである。なお既述のように、各事例が生じたのは1999年の後半から2000年である。次に挑戦を受けた「場所」と「対象機関」であるが、例えば事例（6）のオハイオ州ダグラス・カウンティの場合、苦情の申し立ては同カウンティのすべての小学校を対象にしているのではない。多くの場合、公立学校システムの特定の学校を対象にしている。「挑戦者」では親が圧倒的に多いものの、純粋に親が挑戦している場合と、宗教グループなどが背後に関わっている場合があると思える。また校長や学校管理者が何らかの具体的な措置を指示したとしても、もともとのきっかけは親などから何らかの働きかけがあったと考えてよい。「挑戦者が求める措置」で「教室で読むべきではない」がある。これは典型的には教師が授業で声を出して読むことを意味する。あるいは生徒に読ませることも含む。最後に「機関の対応」である。こうした事件では非常に多いのだが、最終的な措置が示されていない場合が多かった。以上のような限界を指摘し、以下に各事例をごく簡単に紹介するが、2001年以降に生じた特徴のある事例をいくつか末尾に掲げておいた。

〈表1〉「ハリー・ポッター・シリーズへの挑戦」

	場所	対象機関	挑戦者	挑戦の理由など	求めた措置など	機関の対応など	掲載誌
1	SC	州教委	親グループ	死、憎悪、尊敬の欠如、極悪	学校での使用禁止	州教育委員会として検討する	2000年1月 p.26
2	Marietta, GA	小学校	校長			第5学年の教師に読まないように求める→教育次長が学校での使用を確認	2000年1月 p.26
3	Simi Valley, CA	小学校	親	不快、すぐれた読書教材がある、暴力、反家庭的、宗教、教育的価値がない	自分の第4学年の子どもに読まないで欲しい	図書検討委員会を開催する	2000年1月 p.26
						検討委員会は、授業で使うが生徒は退去してよいとする	2000年3月 p.62
4	Moorpark, CA	学校	親	死、殺人、動物の血を飲むこと、魔法、学校とは無縁の宗教	読まれるときに子どもを退去させた		2000年1月 p.26
5	Mount Vernon, WA	小学校	親	魔法、オカルト	読まれているときに子どもを退去させる。特別検討委員会に懸念を持ちこむ		2000年1月 p.26
6	Douglas County, CO	小学校	親			2つの小学校に親から苦情がだされ、管理者が当該学校の教師に読まないように指示	2000年1月 p.26
7	Lakeville, MN	小学校	親			親の苦情で教師が読むのをやめる→他の親が図書を支持する	2000年1月 p.26
8			Family Friendly Libraries	オカルト、暴力、反家庭的	学校での使用は不適切。学校図書館では親の許可を得て貸出すべき		2000年3月 p.46
9	Zeeland, MI	小中学校	教育長	暴力、死、動物の血を飲むこと、魔法		学校図書館では親の許可を得て貸出す。教室で読まない。今後は購入しない。住民の要求で14名からなる検討委員会設置	2000年3月 p.48
						検討委は教育長の措置を否定し、教育長は決定に従う。唯一の制限は幼稚園から第5学年までは読ま上げない。	2000年5月 p.75
						図書館に購入せず	2000年7月 p.124
10	Rockford, MI	小学校	学区（管理者）	恐怖（scary）		教師に読まないように求める	2000年3月 p.48
11	Northview, MI	学校	管理者	魔法		教師に読まないように求める	2000年3月 p.50
12	Holland, MI	学校	親		教師が朗読中に、親が自分の子どもを自習室に移す		2000年3月 p.48
13	Saginaw, MI	小学校	親	魔法、主を憎悪		親の要求で第3学年担当の教師が教室で読まない。いま1つの学校では親が苦情を撤回	2000年3月 p.50
14	Frankfort, IL	学校	親グループ	親への嘘と思い上がった口のききかた	教室で読むべきではない	親が不適と思うと教室から退去させてよい	2000年3月 p.63
15	Bend, OR	学校	親	子どもを憎悪と反逆に導く、魔法、動物の血を飲むこと、占い	学区の20の学校すべてで、生徒に読まないことを要求		2000年5月 p.77
16	Carrollwood, FL	学校図書館	管理者（校長）	魔法		親の反対を予見して、最初の本以外は買わないと決定	2000年7月 p.103
17	Cedar Rapids, IO	学校図書館	親	魔法や魔法使いの美化	学校図書館からの除去		2000年7月 p.104
18	Whittier, CA	学校	親グループ	魔法	学校での使用をやめる	学区検討委員会は挑戦を拒否する勧告	2000年9月 p.165
19	Dallas, TX	学校	親グループ	暴力、欺きの促進	読まないことを要求	検討委員会は挑戦を拒否する勧告を出し、教育委員会は勧告を支持	2000年9月 p.166
20	Jacksonville, FL	公立図書館	親・団体	魔法の承認、死、親への不敬、魔法は宗教	特に図書館が出そうとしている「ホグワーツ学校修了証書」に反対	館長は修了証書を出さないと決定	2000年11月 p.193
21	Pace, FL	学校図書館	牧師	魔法やオカルトの美化、聖書に反する	図書館からの除去を要求して教育委員会に訴え		2000年11月 p.193
22	Durham, Ontario	学校	親グループ	魔法	教室で使うには親の許可を要求	要求を承認→この措置に反対する親が教育委員会の会議に参加し、結局は7対4で制限をしないと決定	2000年11月 p.216

川崎：ハリー・ポッター・シリーズへの検閲とその理由

(1)サウスカロライナ州：ハリー・ポッターへの「最も派手な抗議」はサウスカロライナ州で生じたという。1999年10月11日、親のグループが州教育委員会を説得して、学校でハリー・ポッターを許すべきか検討するようにさせた。「死、憎悪、尊敬の欠如、極悪」を指摘されたのち、ある教育委員は「検閲は醜い言葉だが、教育委員会の場で聞いた言葉ほどではない」と述べた。

(2)ジョージア州マリエッタ (Marietta) の小学校では、校長が第5学年の教師にたいして、学校がハリー・ポッターの適性を決定するまで、教室で読まないように求めた。学区教育次長は、ハリー・ポッターは学校での使用が認められていたと述べ、「新しい資料が学校に入るとき、すぐれた校長は資料を検討する」と校長を擁護したのである。

(3)ロサンゼルス郊外のシミヴァレー (Simi Valley) では、親が息子のいる第4学年の授業で『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』が読まれることに反対した。その理由は、不快であるとともに、古典などいっそう適切な教材が多くあるとの理由、さらに暴力、反家庭的、宗教、教育的に無価値という理由であった。この申し入れにたいして、学校は親、教師、管理者など7名で構成される検討委員会を設置し、教室で読み上げてよいと決定した。しかしながら同時に、親はハリー・ポッターが読まれているとき、自分の子どもを退去させることができるとした。苦情提供者はこの決定について、学区は子どもを犠牲にして、道徳的な決定やメディアの注目を恐れていると述べた。

(4)カリフォルニア州ムアパーク (Moorpark) では、親が、「死、殺人、動物の血を飲むこと、魔法、学校にあってはならない宗教」との理由で、『賢者の石』が読まれているときに自分の子どもを退去させた。そしてこの親は、人気があるという理由で教師は同書をもぎとることができずにいるが、人気があることは必ずしも最善を意味しないと述べた。

(5)ワシントン州マウントヴァーノン (Mount Vernon) の小学校では、ハリー・ポッターが読まれている間、数名の親が自分の子どもを退去させた。その理由は魔法やオカルトに子どもを誘い込むというものであった。1999年10月19日には3名の親が特別検討委員会に自分たちの懸念を持ち込んでいる。

(6)コロラド州ダグラス・カウンティ (Douglas County) の2つの学校では、数名の親が苦情を申し込んだのち、学区の教育管理者がこの2つの学校の教師に読まないように求めた。もっとも苦情が出されていない学校では、この措置は取られなかった。

(7)ミネソタ州レイクヴィル (Lakeville) の小学校の場合、数名の親がハリー・ポッターに反対し、1人の教師は読むのをやめると決定した。この措置が引き金になって、他の親がハリー・ポッターを支持する運動を展開することになった。ある親は、教師が読むのをやめると決定したとき、第5学年の息子は打ちのめされたと述べている。

(8)は具体的な挑戦や検閲事件ではない。「家庭にやさしい図書館」(Family Friendly Libraries)は、現在の図書館に批判的で、特に子どもを意識して同性愛に関する図書を非難したり、フィルタリング・ソフトウェアの積極的な導入に賛成したりする全国団体で、図書館員や住民からなる。この団体の「図書報告」では、ハリー・ポッターはオカルト、暴力、反家庭的との理由で、公立学校の教室には適さないと警告している。また学校図書館については、

貸出に親の許可を求めるべきだと主張している。

(9) ミシガン州のズィーランド (Zeeland) では、1999年11月に教育長が図書館員と教師に指示を発し、第5学年から第8学年の生徒がハリー・ポッターを学校図書館から借り出すに際して、生徒は親からの許可を得るように求めた。また同学区では、今後はハリー・ポッターの本を購入せず、教師が教室で読むことを禁じたのである。教育長の言によると、3つの小学校で親からの苦情が出され、教育長自身が『賢者の石』を読み、暴力、ハリーの親の死、魔法、動物の血を飲むといった場面があり、親の了解のもとに生徒は同書に接するのがよいと考えたのである。この時点で、ズィーランド教育協会 (Zeeland Education Association) の会長は教育長の命令ではなく、関係者からなる委員会の決定に委ねるのがよいと意見表明をしていた。一方、教育委員は教育長の措置に親や教職員からの苦情は出ていないと述べた。

そののち親や教師が制限の撤廃運動を展開し、教育長は検討委員会の設置に同意したが、前年11月の指示を撤回したのではなかった。この運動には「読書の自由財団」(Freedom to Read Foundation) なども協力し、「ハリー・ポッター愛好会」(Muggles for Harry Potter) というグループが組織されている。この検討委員会は14名で形成され、親、各学校から1名の教師、それに1つの小学校と1つの中学校の校長からなる。委員会報告は2000年5月1日を期日に出されることになっていたが、教育長は委員会勧告を慎重に検討し、「受容、変更、拒否」を考えると述べた。そして検討委員会は幼稚園から第5学年の生徒を対象に読み上げることはしないという制限を残し、他の制限はなくすという勧告をした。教育長は2000年5月11日にこの委員会決定を受け入れた。なお14名からなる検討委員会が構成されたとき、委員名は公開されなかった。地元新聞が情報自由法に依拠して委員名の開示を求め、委員名が公表されるという出来事もあった。

(10) ミシガン州ロックフォード (Rockford) の学区は低学年の生徒が恐怖を抱くとの理由で、小学校の図書館には購入しなかった。

(11) ミシガン州ノースビュー (Northview) の学校管理者は、親からハリー・ポッターは魔法を促進するとの意見を受けた。そして親の考えを尊重し、教師に教室で読み上げないように求めた。

(12) ミシガン州ホランド (Holland) では親からの苦情を受け取り、教師がハリー・ポッターを読み上げているとき、その親の子どもは退去することになった。この措置に親は満足している。

(13) ミシガン州サギノー・カウンティ (Saginaw County) では、13の学校のうち2つの学校でハリー・ポッターに苦情が持ち込まれた。ある親が自分の娘を担当する第3学年の教師に、ハリー・ポッターは魔法を土台にして主を憎悪していると苦情を申し込んだため、担当教師は授業で読み上げるのをやめている。校長の説明によると、論争を回避するためである。しかし同校の他の教師は授業計画通りにハリー・ポッターを使ったのである。いま1つの学校でも親が第6学年の授業での使用に反対したが、学校が図書を親に読むように提供し、そののち親は苦情を引き下げている。

(14) イリノイ州フランクフォート (Frankfort) では、親のグループが教育長にたいして親

川崎：ハリー・ポッター・シリーズへの検閲とその理由

への嘘と思いが上がった口の利き方を理由に、同学区の生徒に読まないように求め、学区は読みの時間に親が申し出た生徒を退去させるとした。教育長によると、これは検閲ではなく親の責任の尊重であると説明している。

(15)オレゴン州ベンド (Bend) では、教師が教室でハリー・ポッターを読み上げたのち、第4学年の親が子どもを憎悪と反逆に導くとの理由、魔法、動物の血を飲むこと、占いを理由に、学区の20の学校での使用中止を求めた。

(16)フロリダ州キャロルウッド (Carrollwood) の管理者 (校長) は、親が魔法を理由に反対するのを懸念して、学校図書館に今後ハリー・ポッターを購入しないと。もっとも生徒は学校にハリー・ポッターを持ってきてもよいし、購入した図書を除去しないと述べた。校長は実際には苦情が出されていないことを認めている。

(17)アイオワ州シーダーラピッズ (Cedar Rapids) では、ある親が魔法や魔法使いの美化を描いているとの理由で、学区の学校図書館からの除去を申し出た。申し立てによると、「これらの図書は子どもの道徳性を崩壊させ、したがって最終的には社会を壊す」となっていた。

(18)カリフォルニア州ウィッチティア (Whittier) では53名の署名を添えた請願が学区に提出され、子どもに魔法を植え付けるとの理由で、学校からの除去を求めている。学区の検討委員会が3冊の本を検討し、苦情提供者の申し出を拒否する勧告をまとめた。検討委員会の報告は、「暴力が記述されているからといって学校で禁止すると、『ヘンデルとグレーテル』、『赤ずきんちゃん』…もリストに加えなくてはならない」、「十分な証拠によると、ハリー・ポッター・シリーズは読書嫌いな子どもを読書に向けさせている」と記入していた。

(19)テキサス州ダラス (Dallas) では、親のグループが暴力や欺瞞の促進を理由に『賢者の石』を読み上げることに反対した。そののち検討委員会が設けられ、従来通り読み上げてよいと勧告した。教育委員会は3対1でこの検討委員会の勧告を支持し、従来どおり生徒に声を出して読んでよいと決定した。

(20)ジャクソンヴィル (Jacksonville) 公立図書館の分館ではハリー・ポッターの新刊『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』の刊行に合わせて、約200名のポッター・ファンに魔法の修了証を出そうとした。これは子どもの読書を促進するためであったが、たちまち親や全国的な宗教団体の怒りをかい、図書館はこの企画を放棄した。図書館の企画では奇術師を招き、また子どもに好きな節を読ませ、参加者に「ホグワーツ魔法学院修了証書」(Hogwarts' Certificate of Accomplishment)を出そうとした。この件を知った親が、魔法の承認、死、親への不敬などを理由に、図書館理事会と市議会に苦情を持ち込んだ。そして「図書館は子どもが本を読めば、それでよいという態度を取って」おり、この態度には賛成しがたいと述べた。またオーランドにある団体リバティ・カウンセル (Liberty Counsel) に連絡したが、この団体はハイスクールの卒業式での祈祷を求めて闘っている宗教団体であった。同団体の会長によると、「魔法は宗教であり、魔法の修了証書は修正第1条の国教禁止条項 (establishment clause) に違反して、特定の宗教を認めることになる」と述べた。そして提訴も辞さないと言ったのである。

ジャクソンヴィル公立図書館長の話によると、リバティ・カウンセルの手紙が図書館に届く

前に事態は沈静化した。すなわち数名の親からの苦情を受けて、図書館は修了証の提供を中止したのである。リパティ・カウンシルは図書館の措置に満足するとともに、提訴はしないとの声明を発表している。

(21)フロリダ州ペース (Pace) では、牧師が魔法やオカルトの美化、聖書の教えに反するとして学校図書館からの除去を求めた。28の学校の内、少なくとも16の学校にハリー・ポッターがあったが、この牧師は除去を求めて教育委員会に申し入れた。

(22)オンタリオ州ダラム (Durham) では、約40名の親のグループが教室で使用するには親の許可を必要とするように要求した。その理由は魔法の促進であり、教育委員会はこの申し入れを認めている。しかしながら、そののちになってハリー・ポッターを擁護する親が教育委員会で発言し、最終的に教育委員会は7対4で親の許可を得るという措置を撤廃した。

さらにいくつかの特徴ある学校図書館と公立図書館での事例を示しておく。

カンザス州オスカローザ (Oskaloosa) 公立図書館は、ハリー・ポッター・シリーズの非魔法人マグル (Muggles) に関するストーリーテリングを企画した。また図書館長は当地の新聞に「やる気のある若い魔法使い」のための「マグル研究」という広告を入れたので、住民が苦情を申し出た。そのため図書館理事会は特別会議を開催し、秘密会にしてプログラムを変更しないと決定した。しかし住民が公開の会議という原則に違反していると主張し、提訴すると脅かした。そのため理事会は決定を翻し、このプログラムを中止すると決定したのである。この決定は2001年6月7日のことであった。館長は「もしこの事件が図書禁止についてのものであったなら、私は本件を最高裁まで争ったであらう」と述べている (*Newsletter on Intellectual Freedom*, September 2001, p. 197)。

2001年10月、フロリダ州ジャクソンヴィルでは親がハリー・ポッター・シリーズの魔法を理由に苦情を提供した。この学区の指針によると、親が苦情を提供すると検討委員会を設置するが、委員会の検討中は当該図書を借り出すには親の許可が必要となる。教師、図書館員、親など12名で構成される検討委員会は10月下旬に結論に達し、そこでは制限のない利用を決定し、親の許可は必要でなくなったのである (*Newsletter on Intellectual Freedom*, January 2002, p. 49)。

ニューメキシコ州アラマゴード (Alamogordo) では対照的な出来事が生じている。2001年12月30日、教会の空き地で牧師の30分間の説教ののち、数百人の支持者と800人に近い抗議者が見守る中で、ハリー・ポッター・シリーズ、J.R.R.トルキン、W.シェイクスピアの作品などが悪魔的な本との理由で文字通り焼かれたのである。これと対照的に公立図書館ではハリー・ポッターの本を展示し、市民からの金銭的寄付もあって、ハリー・ポッター、トルキン、W.シェイクスピアの本を追加購入することにしたのである (*Newsletter on Intellectual Freedom*, January 2002, p. 49)。

アーカンソー州シーダーヴィル (Cedarville) では、権威を見下し、魔法を促進しているとしてハリー・ポッターに反対が出され、15名で構成される検討委員会が設置された。この検討委員会は2002年5月に抑制のないアクセスを維持すべきとの結論を出し、教育委員会に勧告した。しかし教育委員会は3対2で、ハリー・ポッターの貸出については、親からの書面での許可

を必要とするという措置を講じた。7月3日に、検討委員会の委員であった親や図書館員などが教育委員会の措置を違憲として連邦地方裁判所に提訴している (*Newsletter on Intellectual Freedom*, September 2002, p. 197; July 2003, p. 136)。

この事件はハリー・ポッターの本について図書館を舞台に生じた最初の裁判事件であり、「読書の自由財団」(Freedom to Read Foundation)、アメリカ出版協会 (Association of American Publishers)、「表現の自由のためのアメリカ書籍商基金」(American Booksellers Foundation for Free Expression)を始め多くの団体が支援して、準備書面を用意したりした。2003年4月22日に連邦地裁は判決を下し、そこには「学区の図書館のあらゆるフィクションに適用される管理上の措置はともかく、その他の制限がない場所」に置かれねばならないと判示し、原告の訴えを認めたのである。判決によると、教育委員会は図書が不服従を促進し、学校運営の秩序に脅威になると主張しているが、この主張には根拠がないとした。また教育委員会はハリー・ポッターが特定の宗教を促進するとの信念を共有して図書の利用を制限したが、これは生徒が有する修正第1条上の権利に違反すると結論した (*Newsletter on Intellectual Freedom*, July 2005, p. 169)。

なおシーダーヴィルとは異なる裁判事件がジョージア州ギネット・カウンティ (Gwinnett County) で生じている。ギネットでは1人の親が魔法の促進を理由に学校図書館からハリー・ポッター・シリーズの除去を求めて運動するが、検討委員会は除去などの措置を拒否した。こうした動きが数回くりかえされたのち、この女性は提訴したが、2007年5月29日に判決が下され、その訴えは認められなかった (*Newsletter on Intellectual Freedom*, September 2006, p. 231; March 2007, p. 72-73; July 2007, p. 151; September 2007, 205-206; なおこの2つの裁判事件については、上田伸治氏の論文がある)。

4 ハリー・ポッター・シリーズについて

上記で明らかのように、ハリー・ポッター・シリーズは第一作『ハリー・ポッターと賢者の石』出版当時から絶えず挑戦を受けてきた。その大きな要因はこの物語がファンタジーであり、冒険物語であることが関係している。ここではまずファンタジーとしての「ハリー・ポッター」について検討する。

「ナルニア国年代記」の作者C・S・ルイスは『文芸批評の一つの実験』の中で、「文学用語としてのファンタジーというのは、起こりえないことや超自然的なことを扱った物語を意味する」と述べている (Lewis, 1961: 50)。トルキンは「妖精物語について」というエッセイの中で、ファンタジーを「心象形成能力」とし、想像力と同じだとしている (トーキン, 1973: 92)。また、ファンタジーと妖精物語をほぼ同一に見なし、その定義を「諷刺、冒険、道徳、空想など、その主な目的がなんであれ、妖精の国にふれ、それを扱う物語」(トーキン, 1973: 20)と定義し、妖精の国そのものは「魔法」と考えた。『児童文学論』においてリリアン・スミス (Lillian H. Smith) は「独創的な想像力から生まれるものであって、その想像力とは、私たちが五感で知りうる外界の事物から導きだす概念を超えた、より深い概念を形成する心の働き」と定義している (スミス: 273)。ファンタジー文学評論家のリン・カーター (Lin

Carter) はファンタジーを「科学にも超自然にも属さない驚異の物語」とし、「この種の物語の本質は、一語に要約できる一すなわち、魔法に。とすれば、ファンタジーとは、その中で魔法がじっさいにはたらく作品ということになる—おとぎ話でもなく…心を刺激し、心を働かせる物語」(カーター: 11) と定義している。『図説 ファンタジー百科事典』では、ファンタジーを〈心の願望〉の働きとし、その原型を妖精物語と英雄叙事詩に探っている。以上からファンタジーのキーワードを取り出すと、「想像力」、「起こりえないこと」、「冒険」、「願望成就」、「魔法」などが抽出されよう。そして、こうしたものを包括する言葉が「魔法」といって差し支えないだろう。なぜなら、「魔法」そのものが〈心の願望〉を成就する一番わかりやすい記号であるからだ。したがって、ファンタジー文学は多少の差または質の違いはあっても、「魔法」をキーワードとする物語といえよう。ハリー・ポッター・シリーズは魔法世界が舞台となっている点で、カーターの定義に一番近く、物語の中で魔法が実際にはたらく作品である。

ファンタジーには大きく分けて3つの種類がある。1つは別世界(トルキンは「第二の世界」と呼ぶ。Tolkien, 68)ですべて物語が終始するもので、トルキンの『指輪物語』やル＝グウィン(Ursula K. Le Guin)の「ゲド戦記」がその代表例である。2つ目は現実世界と別世界を主人公が往来するもので、ルイスの「ナルニア国年代記」が代表例である。3番目は現実の日常世界の中に魔法世界が飛び込んでくるタイプである。エヴリデイ・マジックともいい、E・ネズビット(Edith Nesbit)の「サミアッド」シリーズなどが含まれる。では「ハリー・ポッター」はどのタイプに属するのであろうか。

「ハリー・ポッター」の世界はトルキンやル＝グウィンのように、地理空間、言語、歴史などすべてが純粹に作者の創造(トルキンは「準創造」と呼んでいる)によって構築された世界ではない。ハリーの世界は時間・空間を共有するイギリスそっくりの〈現実世界〉と〈魔法世界〉が連続する一種の第二世界である。ダズリー家の住むプリヴェット通り4番地は、第二世界における普通の人間世界である。そしてhogwartsやその他の魔法学校は、第二世界における魔法世界なのである。したがって、その様な〈現実世界〉に魔法使いが登場しても不思議はないし、魔法学校にマグル(〈現実世界〉)出身の生徒が入学していてもかまわないのである。こういう設定であるからこそ、hogwartsでの「純血」、「汚い血」の対立が起こり、物語のプロットに複雑さを加味することができるのである。したがって、第二世界だけで事件が生起するハイ・ファンタジーの範疇に「ハリー・ポッター」を入れることができるだろう。いわばハイ・ファンタジーの亜種といってよく、パラレル・ワールドを得意とするダイアナ・ウィン・ジョーンズ(Diana W. Jones)のファンタジーに近い。

5 ハリー・ポッターに対する挑戦

第3章で詳述した「ハリー・ポッター」に対する挑戦の理由は大きく3つに分けることができよう。1つは反聖書的として、福音主義的なキリスト教徒たちによる宗教的な批判で、「魔法」をめぐる問題が中心である。2つ目はファンタジーと現実を識別できないため、魔法を興味深いものとしてオカルトに走るきっかけを与えるという懸念である。3番目の理由としては、「暴力、死、殺人、反抗、反家庭的」など、子どもの読書としてふさわしくないと考える道徳的、

教育的理由である。それについて以下検討を加えてみたい。

5.1 ハリー・ポッター・シリーズは反聖書的か

エリザベス・A・ポーは『『ハリー・ポッター』の弁護』というエッセイの中で「キリスト教社会の中で読者や批評家は魔法使いとしてのハリーに関して見方はまちまちである」とし、「ハリーの魔法はファンタジー物語の無害な一面」としてとらえる者も、「ハリー・ポッターを読むことで、若者が邪悪な魔法に対して抵抗力がなくなり、オカルトに走る」と心配する者もいると述べている (Poe: 210)。ハリー・ポッター・シリーズでは、主人公が魔法使いであり、その魔法が魅力的に描かれているので、若い読者は魔法を良いものと考えてしまうというのだ。こうした苦情は概ねファンダメンタルなキリスト教徒から寄せられることが多く、魔術を実在のもの、邪悪なものとして信じている立場から発せられる。したがって、ハリー・ポッターの本に見られるように、厳密なカリキュラムをとおして魔術を修得し魔法使いになることは、「オカルトや悪魔儀礼」につながると考えるのである。魔法(魔術)＝邪悪で、神に忌み嫌われるという考え方は旧約聖書からきているようだ。

あなたのうちに自分の息子、娘に火の中を通らせる者があってはならない。占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。これらのことを行う者はみな、主が忌みきらわれるからである。これらの忌みきらうべきことのために、あなたの神、主は、あなたの前から、彼らを追い払われる。(「申命記」18: 10-12)

実際、教会は魔法・魔術に関してはきわめて神経質であり、占いや偶像崇拜、異教の神々の背後にはサタンがいるという信念があった。ハリー・ポッターを反聖書的と見る考え方は、想像的文学全体に対する古来からの見方をなぞっている観がする。古くはプラトンによるフィクション(彼は広義の「詩」ととらえた)蔑視は言うまでもなく、キリスト教会も早くから教父たちは異教神話(ギリシャ、ローマ神話など)に対して「悪魔的幻影」(Lewis, 1996; 176n)と見なしていた。テルトリアヌス(Tertullian)、ヒエロニムス(Jerome)、アルクウィン(Alcuin)は「芸術はその本質において悪魔的」(Ryken: 14)と考えていたようだ。アウグスチヌスもプラトンの考えを踏襲し、文学におけるフィクション性は道徳的ではないとした。清教徒たちはフィクションそのものを「嘘」とみなしていたが、その考えは植民地アメリカにも継承され、コトン・メイザー(Cotton Mather)やリチャード・バクスター(Richard Baxter)は「[[想像的文学は]若者や自分の考えを持たない人々を惑わし墮落させる」(Ryken: 16)と信じていた。現代でもキリスト教徒の中にはその信念を共有しているものもあり、大きな魅力を持つものには用心する傾向がある。

レベッカ・スティヴンスは、ハリー・ポッター・シリーズへの挑戦をアメリカの現象だと指摘する(Stephens: 51)。イギリスにおいて同シリーズへの検閲の試みは滅多にないと言われているが、もちろん皆無というわけではない。しかし、スティヴンスは「アメリカには国の教会がないこと、英国における民主的ではっきりと世俗的な教育システムがないこと、アメリカの宗教の多様性」(Stephens: 52)などが関係しているとする。進化論教育が裁判になる国で

ある。百出する価値観、多様な人種と文化的慣習を抱えたアメリカには、統一原理として、唯一の権威者＝神が必要だと感じている人びとが少なくない。そうした人々に「ハリー・ポッター」は「1人の統制する権威ある枠組み」(Stephens: 56) に対する脅威として受け取られているようだ。

同じく魔法をキーワードとするC・S・ルイスの「ナルニア国年代記」と比べてみるとよい。「ナルニア国年代記」は概ねすべての宗派のキリスト教徒にすぐれた児童書として受け入れられている。しかし、ナルニアにはホグワーツ以上に神話的な生物が登場する。竜、一角獣、ドワーフ、巨人、魔女、人魚、物言う獣、および水の精、木の精など異教神話がたっぷり含まれている。にもかかわらず、ピーター・チアッチオ (Ciaccio: 35) は、ルイスがよくて、ローリングがいけないのは、権威によると指摘する。それは、作品中で魔法を使うのはどのような権威によるのかという点である。つまり、「ナルニア国年代記」では、一部を除いて、超自然的な力を行使するのはアスラン (ナルニアの創造主にあたるライオン) と魔女である。それは生得の力で、獲得した技術ではない。しかも、強力な魔法を使う魔女も最終的にはアスランの比ではない。魔女の力は自己中心的で破壊的である。一方、アスランの力は愛から発せられる。自己犠牲的であり創造的である点で、ナルニアは聖書的なメッセージが明確である。

ローリングの作品では、魔法はある種の人々の間で修得できるスキルである。超自然的というより、実際に訓練し修得する技術である。また、魔法薬学や天文学も擬似科学的である。したがって、魔法そのものが良いもので、アクセスが可能であるような錯覚を与えるかもしれない。さらに、この作品ではだれが魔法を使うのかではなく、魔法をどのような目的で使うのかによって、善悪が分かれる。魔法を苦情の理由にする人々も、「ナルニア」の例でわかるように、一概に超自然的な力を悪と見なしているわけではない。要するに、「何の権威でこのようなことをするのか」(マタイ21: 24) という聖書のとおり、神の権威かそれ以外かが問題なのである。しかし、こうした修得しうるスキルであるような魔法の描写が次のテーマである、ファンタジーとリアリティの混同の問題に関係する。

5.2 ファンタジーとリアリティの混同

魔法を実在のものとは考えないが、子どもがファンタジーの世界を現実だと混同する恐れがあると懸念する人々がいる。

ハリー・ポッター・シリーズの危険性に関するウェブ上のディスカッションも活発で、懸念する側の意見の一例を挙げると、「人気作家やコンピュータープログラマーによって異教を教えられた多くのこどもにとって、ターニングポイントはもうない…DD (dragon and dungeon) やホグワーツ魔法学院として若者用にパッケージされ、虜にしたファンをオカルトの力に屈せさせる。若者は無抵抗になる」(quoted Kjos from Taub and Servaty-Seib: 16, 17)。もちろんそれに対する反論もある。そして「ファンタジーに関する限り若者は判断力がないので、親は若者が読んだり聞いたりすることすべてを完全に管理すべきである」とメディアに喧伝されているとヒックス (quoted Hicks from Taub and Servaty-Seib: 17) は指摘している。こうした考えには、子どもは無垢で庇護が必要であるというステレオタイプな考え

が前提となっている。アメリカ図書館協会は、「本の中身が子どもや青少年を墮落させ、繊細で、だまされやすい読者を傷つけ、または基本的な価値や信仰を損なうと考えているのかもしれない」(quoted ALA from Taub and Servaty-Seib: 13) と述べている。

しかし、発達心理学では、5歳くらいで実在と架空の違いをある程度見きわめられる力があると見ている。「ハリー・ポッター」を独力で読める年齢ならファンタジーと現実を混同する恐れはあまりないと考えられる。英国国教会のある司祭は「ハリー・ポッター」を読める子どもには魔法を真剣に受け取るなど言う必要がないと述べている (Stephens: 51)。

「ハリー・ポッターとキリスト教神学」の中で、チアッチオも子どもがフィクションと現実の違いをきちんと認識していることを指摘している。そして、イタリアの記号学者ウンベルト・エーコ (Umberto Eco) のコメントを援用して、問題はむしろ大人自身にあると言う。つまり、「子どもの時に魔法の物語を読んだことがなく、大人になるとテレビの言うことは何でも信じてしまう大人」(quoted Eco from Ciaccio: 34) が問題だと述べている。子どものころよりファンタジーに親しんでいると大人になってその混同で悩むことはないというのだ。

ファンタジー作品には魔法世界が描かれることが多いが、とりわけ「ハリー・ポッター」が問題視されるのは、1つには、先のファンタジーの種類で説明したように、〈魔法世界〉と〈現実世界〉との境界の曖昧さによると言えるかもしれない。この点に関しても「ナルニア」と比較するとわかりやすい。例えば『ライオンと魔女』では、衣装ダンスが別世界への通路となる。しかし、いつもその通路が使えるかと言えばそうではない。これは『銀のいす』で明らかにされるが、アスランが呼ばない限り、子どもたちはどんな通路であろうとナルニアへは行けないのだ。また、別世界ナルニアで何をしようと現実世界に持ち帰ることはできない。そして、『ライオンと魔女』でわかるように、15年間もナルニアで過ごした4人の子どもたちが現実世界へ戻れば、行った時から全く時間の経過がない。ネズビットが『お守り物語』で使用した「別時間」モチーフである。つまり、別世界でどれほど時間が経過しても現実世界では一切時間の経過がないのである。ナルニアは完全に別世界であり、現実世界との境界がはっきりしているので混同される恐れがない。

一方、ハリー・ポッター・シリーズでは、魔法省の大臣はイギリスの首相と連絡を取り合っていたり、危険な囚人が脱獄したニュースがマグルの世界でも報じられる (『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』)。ハリーの〈魔法世界〉はホグワーツ特急や空飛ぶ車があれば往来できる連続した場所なのである。この物語はそのように設定されているのである。おそらく家族と一緒に楽しんで読めば、子どもが現実とファンタジーを混同する恐れは減じるのではないだろうか。

5.3 「暴力や死」の描写の背景

この問題を検討する前に、背景となるファンタジーの流行について考察したい。

安藤聡氏は『ファンタジーと歴史的危機』の中で、ファンタジーの重要な作品を輩出した時代を1860年代、1900年代、1950年代とみて、この3つの年代は「何らかの意味で『歴史的危機』といえる時代であることが共通している」と述べている (安藤: 7-8)。「歴史的危機」とは

「ひとつの世界観が崩壊し、それに変わる新しい世界観が未だ確立されず、その非連続的変化の狭間で人間が真の自己を見失い、方位喪失の不安に陥っている状態」(ホセ・オルテガ・イーガセ, 引用安藤: 9) であるという。1860年代はダーウィンの進化論などによりキリスト教に支えられた世界観が揺るがされ、人々が不安に陥った時代と安藤氏は見る。この時代に活躍した児童文学におけるファンタジー作家はルイス・キャロル (Lewis Carroll) とジョージ・マクドナルド (George MacDonald) が挙げられるが、マクドナルドは同時代の科学や進化論に対して批判的である。

1900年代はイギリスにおいてヴィクトリア時代が終焉を迎えた時期である。「工業化による伝統的風景の喪失がより顕在化した」こと、また「西洋ではひとつの世紀の終わりが時代の分水嶺として意識され、それまでの百年間で築き上げた世界観が初期化される機会である」と認識されたことが「歴史的危機」という (安藤: 12)。この時代の代表的ファンタジー作家はケネス・グレアム (Kenneth Grahame) の『たのしい川辺』 (*The Wind in the Willows*, 1908) と J・M・バリー (J.M. Barrie) の『ピーター・パン』 (*Peter Pan*, 1904、最初は戯曲として執筆) である。「成長拒絶、退行という問題は過去を志向していたこの時代のひとつの典型」(安藤: 15) だと安藤氏は指摘する。

1950年代はイギリス児童文学の黄金期と言われ、C・S・ルイス、メアリー・ノートン (Mary Norton)、L・M・ボストン (Lucy M. Boston)、フィリッパ・ピアス (Phillipa Pearce)、J・R・R・トルキンが活躍した。この時代の特徴は第二次大戦後加率的に感じられた伝統の喪失への不安である。ファンタジーは過去との断絶という不安を慰撫するために、過去への回帰とそこからくるアイデンティティの確立を助けると考えられた。確かにルイスのナルニアは中世のヨーロッパを彷彿させる。トルキンのミドルアースは人類に先立つ魔法使いやエルフが登場する。ボストンは数百年前に死んだ子どもが住みつく古い荘園を背景とし、ピアスの『トムは真夜中の庭で』 (*Tom's Midnight Garden*, 1958) は老女の少女時代の夢の中に少年が入り込むというファンタジーである。

それでは、「ハリー・ポッター」の時代はどうであろうか。20世紀末は、ノストラダムスの予言は問題外としても、グローバリゼーション、環境問題、いじめや虐待、貧困、家庭内暴力など、社会不安は21世紀に向かって大きくなる一方であった。こうした社会的コンテクストにおいて読者はファンタジーをいっそう求める。トルキンによれば、ファンタジーは「諷刺、冒険、道徳、空想」(Tolkien: 43) を目的としているので、社会を映し出す鏡の役割を果たすことができるからである。同時に、もっと重要な機能として逃避・回復・慰めを提供する。〈心の願望〉に従って、大きなものへの帰属感、心の拠り所を求めて非日常の世界へ逃避し、回復され、慰められ現実世界に戻ってくることをファンタジーは可能にする。20世紀末以降はおびただしいファンタジー作品が出版され、RPG (role-playing game) など枚挙にいとまない。すべてのファンタジーが実際に回復や慰めを提供しているかどうかは別として、多くの人々がファンタジーに魅力を感じていることは明らかであろう。

一方で、児童文学一般の傾向を見ると、子どもを支える大人の変容が見られる。頼りになる両親、家庭の中心にいる母親が姿を消し、両親の離婚など、子どもが頼る大人像が崩壊してき

ている。自立を余儀なくされた子どもが自分で生きるすべを考える内容が目立ってきている。シンシア・ヴォイト (Cynthia Voigt) の『ホーム・カミング』(*Homecoming*, 1981) やロバート・ウェストール (Robert Westall) の『海辺の王国』(*The Kingdom by the Sea*, 1990) などに、そうした子どもの姿が描かれている。

『ハリー・ポッターと賢者の石』(1997) がそのような時代背景をもって生まれてきたことを見逃してはならない。「日常生活を守る役割をしてくれている」(河合: 176-7) 家族が崩壊し、その「守り」から離れた子どもたちが増えているアメリカにおいて、ハリーに自分を重ねる子どもがいることは確かである (もちろんこれはアメリカだけの状況ではないが)。このような中で、非日常の世界に一時的な逃避を求めることもファンタジー隆盛の要素であるだろう。「アメリカを憂う女性たち」(Concerned Women for America) のような団体がハリー・ポッター・シリーズに対して懸念するのは、まさに、秩序崩壊という不安であろう。先に世界を統制する権威に言及したが、家庭では親がその権威にあたるだろう。「ハリー・ポッター」に見られる「親への嘘」、「親への不敬」、「権威を見下す」態度などに神経質になる親がいるのはわかる。ハリーはその悪いモデルになるというのだ。

5.4 「暴力や死」を扱っているという非難について

一般的にファンタジー作品には善と悪の対立という大きな枠組みを持つものが多い。その枠組みの中では当然「戦い」ということが避けられない。ハリー・ポッター・シリーズはハリーの成長に比例して彼を取り巻く悪の勢いも増大し、肉体的、心理的暴力も強調されていることは確かである。「吸魂鬼」が『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』で初めて登場する。囚人の看守であるはずだが、人から生気や希望を吸い取り、抜け殻にしてしまう力を持っており、それがハリーを襲う。このキャラクターはかなり恐ろしいと思う。第3章 (3) のシミヴァレーの事例で記したとおり、親が子どもに読ませたくない和学校に訴えたのはこの吸魂鬼の不気味さが理由かもしれない。ハリーの味方ではないが、ヴォルデモート陣営かどうかも定かでないという不安感が読者を落ち着かせないからだ。しかしこの物語はその不安感を軽減させる道を用意している。つまり、ハリーは「守護霊」の呪文を会得することで吸魂鬼から自衛する方法を学ぶのだ。自分を害するものはたくさんあるが、身を守ることも可能であるとこの作品は示しているのである。

『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』ではハリーをめぐる危険はエスカレートし、ついに学院の生徒が死ぬという事件が起きる。巻を重ねるごとに、ハリーの味方であった人々が次々と殺され、物語は次第に暗い色調に染め上げられていくかのようである。しかし、ハリーはそうした試練を通過するごとに力をつけていく。と同時に彼は誰の心にも悪が潜在していることに気づかされるのだ。最終巻でハリーの苦悩はクライマックスに達するが、トルキンが「妖精物語について」で言うように、悲しみや失敗という「不幸せの存在は、救われることのよろこびにとってはなくてはならないもの」(Tolkien: 81) というファンタジーあるいはフェアリー・テールの特徴がここにも響いている。『死の秘宝』における大団円は、キリスト教的なテーマをはっきりと提示している。つまり、勇気と愛と自己犠牲がホグワーツを悪から救うという結

末は、聖書的である。

ところで、暴力を扱うという点で、「ハリー・ポッター」に苦情を申し立てる人々は「ナルニア」にはあまり文句をつけない。しかし、『ライオンと魔女』でさえ、出版された当時イギリスでは暴力が扱われていると作者ルイスは批判された。そうした批判に対してルイスは次のように答えている。

ゲーペーウー（ロシアの国家政治保安部）や原子爆弾のある世界に生まれてくる世代にそのような教育（子どもをおびえさせない）をするという考えは、何か滑稽な気がする。残忍な敵に出会うなら、少なくとも勇敢な騎士や英雄的な勇気を知らせておくように。…邪悪な王や打ち首、戦闘に土牢、巨人に竜はそのままにしておくべきだ。そして悪党は作品の最後には確実に殺されるようにしておけばよい（Lewis, 1966: 31）。

ルイスはさらに、子どもは怖い話が好きで、ある程度怖い話を聞きたがるし、聞く必要もあると述べている（Lewis, 1966: 31）。もちろん過度に反応する子どもも中にはいるので、それは親が判断して、読むのを控えさせる必要があるかもしれない。1950年から1956年に書かれた「ナルニア国年代記」に描かれた暴力や戦いの場面は、「ハリー・ポッター」で扱われる暴力や戦いの描写とは比べものにならない。トルキンの『指輪物語』に比べても「ナルニア」はのんびりした描き方である。それは、ルイスが生きた時代が単に今よりよき時代であったわけだからではない。ルイスはナチスの残虐をリアルタイムで知っている世代である。ナルニアとハリー・ポッターでは中心となるテーマが違うから、自ずと描き方は異なるのだ。ナルニアでは事態を收拾するのはアスランである。一方、ハリー・ポッターは否が応でもヴォルデモートを滅ぼすという英雄的宿命を帯びているのである。したがって、ハリー・ポッターの戦いの場面は多く、かつリアリスティックになるのだ。しかもホグワーツの生徒たちを等身大に描こうとするこのシリーズでは、全体がファンタジー仕立てでありながらその表現は当然リアリスティックになる。そして、何よりも「ハリー・ポッター・シリーズはわれわれの時代の物語であるのだ」（Stephens: 62）。

子どもをすべての恐ろしいことから守るべきだと信じる親は少なからずいる。小さいときに「グリム童話」は残酷だから読ませないと主張する親は日本でも珍しくない。現実にはひどい事件がいっぱいあるのだから、物語まで残酷なものを読まず必要はないと考える人はいるだろう。その点に関して、児童文学評論家の脇明子氏は『物語が生きる力を育てる』の中で、「不快感情の体験にかぎっては、物語で味わう方がいい部分も多い」（脇: 84）と述べている。「物語なら多様な体験ができる」とも言う。なぜなら、「ちゃんとした物語なら納得できる形で抜け出せて、しかもその体験が意味のあることだったと感ずることでもできる」（84）し、現実には不快な体験に出会っても、「いつかは抜け出せるという希望をもつ助けになる」（85）と物語における感情体験の意味を述べている。ハリー・ポッターの遭遇する暴力的な世界はだんだん激しくなるが、忠誠心、勇気、自己犠牲を示すハリーの英雄的な行動は若い読者の共感や感銘を呼ぶのである。魔法だけがハリー・ポッター・シリーズの人気の理由ではない。

5.5 「反抗的、反家庭的」という苦情について

第5章の1節ではローリングへの反発が「権威」の問題に絡んでいると言及した。同時に、作品中ハリーが権威あるもの、目上の者への尊敬を欠いているという指摘がある。気に入らない教師には尊敬を払わない。校則は守らない。ハリーは自分の内的なルールにしたがって行動しているように見える。そういう指摘である。しかしこれは児童文学ではよくあるパターンで、とくに「ハリー・ポッター」に顕著というわけではない。また一切ルールを破らなければ冒険もできないので、そもそも物語にならないのである。一方で、ハリーは尊敬する大人の忠告には耳を傾けている点を挑戦者たちは見逃している。

「家庭」を否定的に描いているという非難もあるようだ。その原因はダーズリー一家のカリカチュア的な描き方にあると思われる。しかし、極端に描くことによって、風刺的な意味を伝えつつ、物語として笑い飛ばせるものである。さらに、最終巻まで読むと分かるが、ハリーがダーズリー家で育てられるのは、ハリーの肉親と一緒にいる間は悪から守られるという魔法がかけられているためだった。ここでも、「守り」としての家庭という伝統的なメッセージは消えていない。ウィーズリー家やハーマイオニーの両親など保護者としてまともな家庭も登場させることで、作者はバランスを取っており、「家庭」を軽視しているという読み方は説得力がない。

6 おわりに

以上、ハリー・ポッター・シリーズに対する挑戦の理由とその説明を述べてきた。「反聖書的」という挑戦は一部のファンダメンタリストたちからであるが、彼／彼女らはそもそもファンタジーを欺瞞と同一視し、そうした物語は嘘の温床になり、その他の欺瞞的行為に導くだろうと考えがちである。アメリカに根強いピューリタニズムを下敷きにしていると思われるので、こうした挑戦には理屈ではなかなか折り合いを見つけないことが難しい。それにしても反聖書的という理由なら、プルマン (Philip Pullman) の「ライラの冒険」シリーズの方がハリー・ポッター・シリーズよりずっと反聖書的だと思われるが、ハリー・ポッターが集中砲火を浴びるのは、このシリーズが「ハリー・ポッター現象」と言われるほど世界的なブームになっているからであり、その影響力や波及効果は他の作品の追隨を許さないからであろう。

一方で宗教的リーダーの中にはハリー・ポッターを支持し賞賛するものもいる。「その理由は、本が勇気、愛、友情、忠誠心のような価値を促し、同時に善と悪にたいする道徳的なアプローチをしているからだ」(Taub and Servaty-Seib: 16) と支持する人もおり、ポーが述べるように読書嫌いな若者を読書へと誘ってくれると評価している人もいる (Poe: 211)。

以上のように、検閲の問題は本を離れたところにある挑戦者の主義主張が優先する場合が多い。作品全体がすぐれていても、不快な言葉、たとえば「魔法」が出てくると、シェイクスピアであろうと、グリム童話であろうと、それだけで物語全体を切り捨てようとする (もちろん、一部の弱者に対する思いやりを欠いた表現はできるだけない方がよいのだが)。

検閲はつきつめると、本の読み方に関わってくるというのが筆者の結論である。ハリー・ポッター・シリーズを例にとれば、問題になる魔法使いや魔女、魔術のスキルや呪文はあくまで想

像的な物語の部分でしかない。シリーズの面白さはむしろ全体から来るものである。漸進的な物語の展開方法がこのシリーズの醍醐味でもあるのだ。第1巻におけるハリーの出生の秘密はおとぎ話のパターンで始まる。子どもであるのに、強力な魔法使いヴォルデモートと戦う宿命を担わされたハリーは、「ダビデとゴリアテ」を連想させ、『指輪物語』のホビットをも連想させる。小さな人が、大人でも背負いきれない重荷を負い、解決のキーパーソンとなるのだ。巻を重ねるごとにそれぞれの作品の内容や散見するエピソードが少しずつ明らかにされていくのは刺激的である。例えば、2巻目に登場するトム・リドルの日記がのちにヴォルデモートのホークラックスであることと分かる。最終巻で、それまで曖昧だった問題がすべて意味あるものに収斂していくのを知ったとき、読者は大きな喜びを感じることができるのである。家族が一緒に夢中になって「ハリー・ポッター」を読み、論じ、怠け者の読者が我を忘れて没頭するなら、反家庭的という苦情は的外れであろう。ポーは「批評家たちの心配も、青少年のハリー・ポッター読書熱の前には顔色なからしむるのだ。無精な読者がハリーの本をかぶりつくように読むこと、熱心な読者は何回も再読すること、家族と一緒に読書を楽しむなど、ハリー・ポッターの価値を示しているし、その理由を弁護している」(Poe: 211)と述べている。

とはいえ、「ハリー・ポッター」に挑戦する人々はたいへん真面目な人々であることを忘れてはならない。その本が良くないと思えば自分の子だけに読ませなければよい。しかし挑戦者は、学校の授業や学校図書館の蔵書に文句をつけ、図書の除去を求める。それは、第5章で述べたように、ある意味で利己的ではないのである。自分たちが懸念するアメリカの秩序崩壊への流れに逆らおうという試みである。問題は多様な価値観を認めない所にある。それを極端であると一笑に付すことは簡単だが、むしろ図書への挑戦は社会が抱えている問題を浮き彫りにしているということを認識し、挑戦された図書をめぐっていろいろ議論すること自体は有意義であろう。

〈引用文献〉

第1章「図書への検閲の概観：1990-2005年」、第2章「頻繁に挑戦される図書とハリー・ポッター・シリーズ」の統計に関する部分は、アメリカ図書館協会知的自由部のHPに掲載された統計による。

Ciaccio, Peter, "Harry Potter and Christian Theology," Elizabeth E. Heilman, ed., *Critical Perspectives on Harry Potter* (NY, Routledge, 2009)

Lewis, C.S., *An Experiment in Criticism* (London, Cambridge University Press, 1961)

Lewis, C.S., "On Three Ways of Writing for Children," Walter Hooper, ed., *Of Other Worlds* (NY, Harcourt Brace Jovanovich, 1966)

Lewis, C.S., *Miracles* (originally published 1947; New York, Simon & Schuster, 1996)

Poe, Elizabeth A., "Defending Harry Potter," Nicholas Karolides, ed., *Censored Books II: Critical Viewpoints, 1985-2000* (London, The Scarecrow Press, Inc., 2002)

Ryken, Leland, *Triumphs of the Imagination* (Downers Grove, IL, InterVarsity Press, 1979)

- Stephens, Rebecca, “Harry and Hierarchy: Book Banning as a Reaction to Subversion of Authority,” Giselle Liza Anatol, ed., *Reading Harry Potter: Critical Essay* (Westport, CT, Preager, 2003)
- Taub, Deborah J. and Heather L. Servaty-Seib, “Controversial Content: Is Harry Potter Harmful to Children?” Elizabeth E. Heilman, ed., *Critical Perspectives on Harry Potter* (NY, Routledge, 2009)
- Tolkien, J.R.R., “On Fairy-Stories,” C.S. Lewis, ed., *Essays Presented to Charles Williams* (originally published 1947; Grand Rapids, MI, Wm.B. Eerdmans Publishing, 1978)
- 安藤聡『ファンタジーと歴史的危機』（彩流社, 2003）
- 上田伸治「第7章 アメリカの学校と図書館における『ハリー・ポッター』を読む権利と制限」
上田伸治『アメリカで裁かれた本：公立学校と図書館における本を読む自由』（大学教育出版, 2008）p. 171-195.
- カーター、リン『ファンタジーの歴史』中村融訳（東京創元社, 2004）
- 河合隼雄『ファンタジーを読む』（講談社文庫, 1996）
- スミス、リアン『児童文学論』石井桃子他訳（岩波書店, 1991）
- トーキン、J.R.R『ファンタジーの世界：妖精物語について』猪熊葉子訳（福音館書店, 1973）
- プリングル、デイヴィッド編『図説ファンタジー百科事典』井辻朱美日本語版監修（東洋書林, 2002）
- 脇明子『物語が生きる力を育てる』（岩波書店, 2008）